

■ミッドナイトvs違法深夜番組

毎週土曜深夜01:27——ある衛星チャンネルでは、オトナ向け番組が放送されている。

そうさ、いつの時代もプルスウルトラなお色気番組ってのはあるもんさ！

『朝まで生テレビ！ 今回のチャレンジゲストショーはこの方が登場！

現役プロヒーロー、《18禁ヒーロー》ミッドナイト——！！』

その深夜番組は、年齢制限ギリギリの過激な内容で人気を博していた。

だが実は番組を仕組んでいるのはヴィランであり、裏ではゲスト出演者に放送できないようなことを行い、それをメディア流出させないことと引き替えに奴隷化させているという情報がヒーローたちに入ってきた。

真偽を確認し、ヴィランがいれば逮捕するため、ミッドナイトはゲスト出演と言う形で潜入捜査に来ていた。

(テレビ出演を餌にして、仕事をもらおうと必死な女の子の弱みに付け込んで……か。悪質だけど、ヴィランのやることにしては随分小さいわねえ)

内心で加害者のやることに呆れつつ、表面では笑顔を作るミッドナイト。

男性人気最上位の彼女にスタッフも出演者も緊張と高揚を見せる中、ゲスト用のコーナーが開始される。

『今回ミッドナイトさんには、番組が用意する企画ゲームに挑戦していただきます。

見事クリアすれば賞金獲得のチャンス！

なお審査員としての役割も兼ねていますので、感想や評点などもよろしく願います！』

この番組はアダルトグッズ関係の企業がスポンサーとなっており、その関係で商品宣伝も兼ねてゲストに新製品を《審査》してもらうことがあるらしい。

つまり、淫具の性能テストをさせる、ということだ。

相当にふざけた内容だが……

——この企画をクリアすれば、大物ディレクターからお話に来るそうですよ

この番組を仕切っているヴィランと思いき者。それと接触するには、企画をクリア

しなければならない。

おかしい話だがディレクターはスタッフにもなかなか顔を見せないらしく、あからさまに怪しい存在であるため、その者が加害者……その主犯である可能性は高い。

なににせよ、証拠を掴むためにはふざけた企画でも受けなければならない。

ミッドナイトはノリがいい女性、という演技をしながら企画の概要説明を聞く。

『スタッフがミッドナイトさんに新製品を使用させます。

設定された時間、これらのグッズに耐えられればクリアです！

今回用意されたのはこちら！ 電動式マッサージャー——！』

「え〜〜？ これを使うのお〜？」

（頭おかしいんじゃないのこのスタッフ？！

それともヴィランがおかしくさせてる？）

出てきたのは露骨にアダルトグッズ感全開な電マ。

これを企画者が押し当ててくるので、ミッドナイトはそれを耐えれば企画クリア、賞金獲得というわけだ。

なお、企画者は開発にも携わったという少年。小さな見た目に反してAVなどにも出演したことがあり、電マの扱いも自信があるようだ。

今回はプレゼン・企画と称し、ミッドナイトに公然とセクハラできるとあって何とも機嫌が良さそうである。

【〜〜……今日はよろしくね、ミッドナイトさん♪】

「はい、よろしくね坊や♪」

（こんな小さな子に電マ使われるとか、屈辱ね……！ どうせ感じないだろうけど……こんな番組、すぐ潰してやるわ！）

愛想のいい振る舞いとは真逆に少年と淫具と企画への嫌悪を募らせる。

たとえヴィランが居なくとも、自分にこんな辱めをさせる番組などクレームその他の手段を使って潰すに限る。

そんなことを考える中、少年と司会が説明を続ける。

『さあ、この電動式マッサージャーは既存の商品とはどこが違うんでしょうか？』

【そうだね〜、見た目とか基本性能は従来のものと同じだけど、質感はだいぶこだわってるよ。女性向けに柔らかくして、しっとり吸い付く感じにしたから相当効果が上がったから、今回この番組に持ち寄ってみたんだ】

『では今回、ミッドナイトさんのクリアを阻止する自信アリ、と』

【どうかなー。もしかしたら気持ち良すぎてもっと、ってなるかも。そしたらクリアさせちゃうかな？】

(バカじゃないの……)

『なるほど、とにかく効果だけはお墨付きというわけですね。では早速挑戦していただきますしょう！ すいませんミッドナイトさん、脚をちょっと……』

「あ、はいはい……これでいいかしら？」

《審査》しやすいように、椅子に腰かけたまま脚を広げる。すると男性陣からは歓声が沸き、食い入るように凝視してカメラもミッドナイトの股間をアップで映しだす。

露骨で浅い男の素直さに辟易しつつ、少年が淫具を近付けるのをじっと待つ。

【もし痛かったりしたらゴメンね〜♪ でも痛くてギブアップしてもアウトっぽいから、そこは……】

「ええ、分かってるわよ。クリアしたいから、痛くしないでね♪」

【OK♪ じゃ、いくよ〜♪】

少年がバイブのスイッチを押すと、小刻みに震えて独特の振動音を響かせる。

そしてゆっくり近付ける。少年はさぞ自信があるようだが……それはミッドナイトも同様。

18禁ヒーローの名は伊達ではなく、性交はもちろん淫具も一通り経験がある。

こんなこともあろうかと性感に対する訓練も兼ねて性戯性交を繰り返してきたのだ。

おかげで不感症じみた性感耐性を得ることができ、仮に快感を得たとしても恥ずかしい姿を晒さない確固たる自信がある。

今更マッサージャーを使った刺激など、何も恐れることはない。

ゲームが開始される前からミッドナイトの意識は既に目の前の少年と電マになく、クリアして番組を潰すことを考えていた……

『制限時間は五分間！ ではゲーム・スタート——！』

(はあ……どうせ自分で使った方が気持ち良いんでしょうね……とっとと終わらせて帰りましょうか)

ヴヴヴヴヴヴッ♥♥ ブシュッ♥♥ プシヤァァッ♥♥

「んおっ♥♥♥ おっ♥♥♥ おおおうっ♥♥♥

やめっ♥♥♥ ギブッ♥♥♥

ギブアップううううううっ♥♥♥」

『ここでギブアップ——！ なんと18禁ヒーロー・ミッドナイト、まさかの開始三分でギブアップしてしまった——！』

——だが、新製品の性能は桁違いであった……

(な……舐めてた……っ♥♥♥

媚薬が出るなんて……♥♥♥ 聞いてない……っ♥♥♥)

見た目は従来通りただの電マ。ゆえに隠された機能に気付かず、不意の刺激に思わぬ快感を喰らって堪らずゲームを降りてしまった。

電マの吸い付く質感、適度な振動と少年のバイブ使い。

それもまたミッドナイトを唸らせるものであったが、何よりも効いたのは媚薬効果を持つ粘液と香りだ。

このバイブには媚薬、それも液体状と気体状の二種類が仕込まれており、先端に空いた見えないほどの小さな孔から放出することができる。

その機能を使い媚薬をミッドナイトに浴びせ、単純な振動感触だけでなく粘膜と嗅覚からも責め立て……

結果、小さなバイブだけとは思えない刺激量にミッドナイトは絶頂に次ぐ絶頂に至り、僅か三分でギブアップという醜態を晒すことになってしまっていた。

(それにしても……コスチューム越しに伝わるなんて♥♥

この媚薬……どうかしてるっ♥♥ 完全に違法薬物だわ……♥♥)

ミッドナイトは媚薬もあらかた経験済だが、そのどれをも超える発情効果。

つまり、このバイブの中の媚薬は法外な成分や手段で生成されたものだ。

テレビという場でこんな手を使ってくるとは思っておらず、震えるミッドナイトに愉しそうな司会と勝ち誇った少年の声がかけられる。

『いやー、まさかローションまで出るとは！ 最新技術の一端を垣間見えましたね！』

【バイブっぽくない責めだから卑怯かなと思ったけど、ミッドナイトさん相手だから本気になっちゃった。ここまで効くとは思ってなかったけどね♪】

『ご覧の皆様、是非この商品をよろしくお願ひします！

さて、第一ゲームは残念ながら失敗してしまったミッドナイトさん！

どうします？ リトライしますか？』

「と……当然よ♥♥ リトライ、するわ……っ♥♥」

【声震えてるよ、大丈夫？】

快樂の余韻が長く続き、息を荒くする様子を嗤われながらもリトライ宣言。

この企画のゲームは失敗してもリトライが可能なのだ。用意されたゲームの数に余りがあれば許可され、次のゲームに挑戦することができる。

淫具でゲストを何度も辱めるためのシステムだが……まさか自分が淫具に屈するなど思っていなかったミッドナイトは、リトライすることそのものにすら甚大なストレスを感じさせられる。

（次のゲームで、絶対クリアする……！

あたしに恥をかかせたこと、後悔させてやるんだから！）

『第二ゲームで紹介される商品はこちら！ ラブローションシャワー！』

今度はシャワー型の淫具のようだ。ラブローションと言うものの、つまりはこれも液体型の媚薬。それをシャワーのように噴き出して刺激する、という淫具らしい。

今回は大量の液体を使うため、今は懐かしい熱湯風呂などで使われそうな、透明の浴槽が用意される。

中に入り、またも股間を責められやすいよう脚を開く。女ヒーローのM字開脚にまたもスタジオが悦ぶ中、少年が浴槽の外からシャワーを持ち、先端を股間から少し離れた位置に置く。

『いやー、予想外の効果でしたね。このままでは間違いなく尺が足りません！ 企画者さん、よろしく頼みますよ！』

【はいはい♪ わかってますよー♪】

「あはは……お手柔らかかにね♪」

（くっ……バカにして！ 覚えてなさいよ！）

尺が足りていないため、“工夫”が必要であることを司会が頼む。

それはつまり、ミッドナイトが早々にギブアップしてしまわないよう“手加減”しろ、ということだ。

見下した扱いを受け、表には出さないようにするものの流石に笑顔が引き攣るミッドナイト。

先程は油断したが、今度こそクリアする……決意を改め、ゲーム開始の合図を待つ。

『制限時間まで耐えられるか?! では第二ゲーム、開始です!』
【じゃーいくよー♪】

スイッチが押され、シャワー口から水……媚薬液が流される。
手心を加えているためか、勢いはあまりにも弱い。そのため威力はほとんどなく、ただ媚薬が陰部に当たるだけだ。

『さあ、まずは最弱レベル! 一応水、あ、媚薬が出てはいますが、弱すぎてあまり刺激があるようには感じられません。ミッドナイトさん、どうですか?』

「そ、そうね……このくらいなら全然大丈夫よ」

『まあ流石にこれは耐えるでしょう! では威力アップをお願いします!』

シャアア……ツ♥

「ん……っ!」

【お、まだまだ威力低いとはいえ、今度は大丈夫っぽい?】

「これくらい……余裕、よ……っ!」

(シャワーオナニーなんて飽きるほどヤッてるわよ! 何時間だろうが耐えてみせる……っ!)

媚薬液の勢いが上がり、刺激も相応に強くなる。

第一ゲームの電マでは同等の段階でもかなり危うい状態だったため、今回も良い反応を見せるのかと期待する男性陣だが……

ミッドナイトはまだたつぷりと余裕を見せていた。

電マの時は未知の質感、媚薬という不意打ちがあり、それが振動と同時に送られてきたため、油断していたミッドナイトはあられもない姿を晒してしまった。

だが今回はミッドナイトの方に油断はなく、刺激も媚薬シャワーが当たるシンプルなもののみ。

媚薬もバイブの時と違い大量に必要なためにかなり濃度が低いようで、多少かけられた程度ではどうということはない。

本来の性感耐性を存分に発揮し、むしろ物足りなさすら感じるほどだ。

『そろそろまた威力を上げたいのですが……ミッドナイトさん、本当に大丈夫ですか?』

「あら、心配なの……? さっきはしくじったけど、今回は……んっ! 全然、余裕だから……っ!」

『ありがとうございます! 我々としてもいい画が欲しいところなので遠慮なく威力アップしてもらいましょう! お願いします!』

【いくよ～♪】

「ふふ……遠慮なく、どうぞ……♪」

シヤアアアアツ♥

「んっ！ んんんん……っ！」

(あ、意外にキツ……っ！ 前の媚薬、今になってぶり返してきた……っ！)

そこでもう一段階威力が上げられる。

予想外の快感、更に第一ゲームで受けた媚薬の効果が再燃し、余裕が崩れ出すミッドナイト。

彼女を尻目に、司会が番組の好調ぶりに歓喜する。

『さあここで視聴者数が何と過去最高記録達成！ これは間違いなくミッドナイト効果！ 視聴者コメントも過去に例を見ない勢いで来ております！』

どうやらミッドナイトが出演し、しかも期待以上の姿を見せたことで配信サイトなどを通じてリアルタイムに反響を呼んでしまったらしい。

送られたコメントを司会に見せつけられ、大勢の視線に晒されていることを嫌でも感じさせられる。

『ミッドナイトさん、今回こんなに多くの方が視聴して頂いてありがとうございます！』

「そ……そう、ね……んっ♥ 悪いけど、今……話しかけな……」

『視聴者に何かコメントをお願いします！』

(少しは聞きなさいよっ！)

「ぼ、坊やたちっ！ こんな番組見てないで……っ♥ と、とっとと寝なさいいっ♥♥」

『お叱りの言葉をいただきました！ ……おや、今の発言がもうSNSに投稿され、更に視聴者が増加しています！』

プロヒーロー、現役教師らしく毅然とした対応をしたつもりだが、痴態を見られたくないという感情が伝わってしまったか、男性の欲求を煽ってしまい逆に視聴者が増えていく。

視線を意識したことで局部の感度が引き上げられ、シャワーの威力もまた一段階上昇し、そろそろ危うい状態だ。

「くっ♥ く、ふう……っ♥」

【お、見られて感じてる？ そろそろシャワーでもイッチャうかな？】

シャアアアツ♥

「これ、くらい……っ♥ あ……♥」

(何人に見られてるのか知らないけどっ♥

このままだと不味い……もうなりふり構ってられないわっ♥)

『おおっとここでミッドナイトさんが腰を動かしてシャワーから逃げた！

流石に刺激を受け続けたら厳しいようです！

しかしシャワーも追いかける！ がんばれシャワー！ がんばれミッドナイト！』

くいつ♥ びくんっ♥ シャアアアツ♥

「んっ♥ このっ……っ！ あああ……っ♥」

(やっぱりこの子、無駄に上手いつ♥

シャワーが吸い付いてるみたいに追ってくるうっ♥)

じっとしては、第一ゲームの二の舞を演じてしまう。

少しでも刺激を和らげるためにミッドナイトは腰を動かす。

このゲームでは淫具を直接動かそうとするのはNGだが、体勢を変えるのはアリなのだ。

陰部の位置を変え、水流から逃げようとするが……

少年も器用にシャワーを動かして股間の動きに対応し、的確に陰部を攻撃し続ける。

羞恥心ごと振り切ろうと本気で腰を動かすが、それでも完璧に合わせられ、局部だけでなく会陰部……蟻の門渡りにも当たってしまい、

シャワーの刺激を最も心地よく感じる部位での快感に一瞬大きな声が出る。

「っ♥ ふっ♥ ……っあ♥♥」

【ここかな？ ここがいいのかな？ なら更に威力アアップ♪】

シャアアアアツ♥

「んんっひ♥♥ こんなの♥♥ 何ともっ♥♥ おおおおおおおっ♥♥」

『更に威力が高まりミッドナイト悶絶！

また生配信絶頂を見せてしまうのか——っ？！

さぁ大ピンチなところですが、更にハンデとして、お触りハンドが投入されます！』

「っっ？！♥ ちょっ、あ♥♥ な、何よそれえっ♥♥」

(こ、これ以上の刺激は、流石に……っ♥♥)

ピンチを煽りつつ司会がアイテム《お触りハンド》を持ち、先端をミッドナイトへと向けていく。

この番組のゲームは挑戦者がリトライ可能な代わり、第二ゲーム以降はハンデが課される。

ハンデというのはお触りハンド……細い指揮棒の先に、人差し指を立てた手の模型がついたもの。

これを使ってツンツンと刺激を与え、司会が横槍を入れるのだ。

媚薬シャワーだけで追い詰められている今のミッドナイトにとって、例え素人による粗雑な刺激も致命打になりかねない。

いくらプロヒーローといえど狭い浴槽では躲すのにも限界がある。

むしろ躲そうとすればその拍子に自分から当たりになってしまう可能性があるため、腰を引っ込めるのだが、それはそれでやはり格好的であり……

水流だけでなく、柔らかいシリコン製の指にも触れられてしまう。

「そ、それはちょっとっ♥♥」

『リトライによるハンデですからね〜♪ では視聴者の皆さん、いきますよ！ それ、つん♪つん♪』

つんっ♥ ふにっ♥ シャアアアツ♥

「ま♥♥ 待って♥♥ 待ちなさい♥♥ 商品のテストなんでしょっ♥♥ だからっ♥♥」

(こんなの♥♥ 逃げられな……あ♥♥ 腰浮きそっ♥♥

ダメ♥♥ 耐えないと……っ♥♥)

ビシャアアアアアツ♥♥

「シャワっ♥♥ あ♥♥ もう無理いっ♥♥♥」

びくんっ♥♥ ごちゅううっ♥♥

「イツツ♥♥♥ ああああっ♥♥♥

ダメっ♥♥♥ ギブアツ……あああっ♥♥♥

イクううううううっ♥♥♥」

『ここで耐え切れず絶頂——！ なんとミッドナイトさん、シャワーが気持ち良すぎで自分からアソコをお触りハンドに押し付けてしまいました！

媚薬シャワーとお触りハンド、ダブルの快樂には耐えられなかった——！』

切羽詰まったところでシャワーがまた威力を上げる。

シャワー特有のむずむずとした刺激に思わず腰が浮き上がり、その動きで自ら陰核をハンドに押し当ててしまった。

敏感な部分への強い刺激に、ついに第二ゲームでもアクメを晒してしまう。

「あ♥♥♥ ……っぐうう……っ♥♥♥」

(そんな……♥♥ あたしが、また失態を晒すなんて♥♥

そもそも最初の媚薬が強過ぎるのよおっ♥♥)

絶頂、しかもよりによって自らの失態によるものとあり、羞恥に包まれるミッドナイト。

第一ゲームで使われた媚薬に責任転嫁する必死さを嘲笑うように、リトライするかを尋ねられる。

『いや残念でしたミッドナイトさん！ どうします？ 第三ゲームにリトライしますか？』

「え、ええ……♥♥ リトライよ……っ♥♥」

(ニヤニヤしてんじゃないわよ……♥♥ 次で……次こそ、終わらせてやる……っ♥♥)

心中の誓いすら甘くなりながらも、18禁ヒーローは第三のゲームに挑戦する。